

キセル(煙管)手造り技術

タバコと喫煙具が一つの風習となって伝えられたのは、慶長年間（1596～1615）といわれている。

タバコには、水タバコ、かぎタバコ、紙巻タバコ、葉巻タバコ、パイプによる吸煙とあるわけだが、わが国へはこのパイプタバコのうち、細形パイプと細かく刻んだタバコの葉の形成が最初に入ってきた。

このパイプがキセル（煙管）と呼ばれるが、カシラ（皿のついている部分）と吸い口をラウ（羅宇）によって継がれる形である。ラウは、ラウスの竹を意味するものといわれている。

燕にキセル製作の技術が伝えられたのは江戸後期で、当初は合津系といわれる技法・形態であったが、明治中期以降東京または関西から技術・形式が流入され、職業の好みや用途などにより多種多様なキセルが作られていった。大正初期に入ると手廻しプレスを始め機械化も進み、昭和に入ると中国などにも輸出されてわが国のキセルの一大生産地となっていた。

現存する手造りの技術を伝えている人々は、いずれもかつて手造り全盛時代の各種類にわたるキセルのみでなく、その技法が絶滅したといわれる「手綱」「張り分け」「千筋入」などを復活させ、その技術を高めているが、後継者を持たないことが悩みとなっている。

昭和 52 年 4 月 8 日 燕市指定文化財 無形文化財 工芸技術

